

聖書：使徒 23：12～35

説教題：カイザリヤに着き

日時：2014年8月10日

11節でパウロに素晴らしい約束が与えられました。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。」パウロはもともとローマへ行き、さらにそこから西の果てにまで福音を伝えたいという志を持っていましたが、エルサレムへの旅を続ける中で繰り返し厳しい苦難について予告され、ついにはエルサレムでの殉教を覚悟するようになっていました。そしてエルサレムに着いてからの数日間の出来事は、いよいよパウロにそのことを確信させるものでした。しかし主は「エルサレムであかしするように、あなたはローマでもあかしをしなければならない」と言ってくださった。これはとりもなおさず、主が必ず自分をローマまで連れて行ってくださるという約束でもあります。パウロはどんなに力強い励ましを頂いたことでしょうか。ここエルサレムでのあかしを果たし終えて、必ず自分はローマまで行くことになる！

しかし、この約束が与えられたこと＝以後はスムーズに事が展開していくということではありませんでした。むしろ素晴らしい約束が与えられた次の日に、恐ろしい陰謀がパウロに張り巡らされたことを私たちは見ます。12節：「夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いしないと誓い合った。」このユダヤ人たちは、これまでの成り行きを苦々しく思っていた人たちでしょう。パウロを宮で捕らえて打ちたたき、殺そうとしていたところをローマの兵士たちによって阻止されました。パウロが階段の上から弁明した後も、声を張り上げ、わめきたて、物を放り投げてパウロを何とかしようとはしましたが、うまく行きません。前回はユダヤの最高議会サンヘドリンでパウロを有罪に定める最高のチャンスだったのに、それも失敗に終わった。彼らはもうこの時期を逃してはならない！一刻も早くパウロを殺さなくてはならない！と駆り立てられ、これを実行するまでは飲み食いしないと誓い合ったのです。この陰謀に加わった者は40人以上でした。彼らは祭司長、長老たちのところに行って相談します。パウロをもう一度詳しく調べるふりをして議会に連れて来るように千人隊長に頼んで欲しい。そうしたら、彼が議会に来るまでの間に我々はパウロを暗殺するから、と。

ここから私たちは、主がご自身のしもべを必ず守るという約束は、その人に何ら危険なことが起きないということを意味しないということを知ります。主の約束があれば何の苦勞もなく、ただ幸せで楽な道があるのではない。主の約束がありつつ、一步間違えば殺されてしまうのではないかという道を歩かされる時があるのです。そういうただ中で主の約束は真実に成就するのです。ですから私たちは困難な状態、苦しい状態、危険な状態に囲まれたからと言って、それだけで慌てたり、主の約束を疑ったりすべきではありません。その状況においても主の約束は確かであること、このただ中で主が守ってくださることを見上げるべきです。確かにそこに

も神の守りがあるという実例を私たちは今日の箇所に見るのです。

この状況で新たな展開が生じます。まずそれはパウロの姉妹の子が、ユダヤ人の待ち伏せの陰謀について耳にしたということです。ここから私たちは初めてパウロには姉妹がいたこと、そしてその子どもがこのエルサレムにいたことを知ります。パウロはどのような親戚を持っていたのか、良く分かりません。しかしパウロのおいにあたる青年が、この陰謀のことを知り、パウロに伝えます。するとパウロは百人隊長を呼んで、この青年を千人隊長のところに連れて行ってくれるように頼みます。千人隊長はパウロのおいの手を取り、誰もいないところへ連れて行きます。そして事の次第を聞き、「私にこのことを知らせたことを誰にも漏らすな」と命じ、さっそくその日の夜の内にパウロをカイザリヤに護送する手立てを講じます。このカイザリヤはローマ総督のペリクスが駐在していた町でした。そこでより確かな裁判なり、取り扱いがなされるようにしたのです。

ここに神の不思議な守りの御手が現れています。まずパウロのおいが登場していることがそうです。彼はこれまで聖書に出て来なかった人、またこれからも出て来ない人です。そんな彼が突然現れて、たまたま陰謀の話を目にし、パウロに告げます。また千人隊長がパウロのおいの言葉に聞き入ったことも不思議です。こんな若者の言葉をそう簡単に聞き入れるものでしょうか。おそらく千人隊長は、これまでのユダヤ人の行動を見て、彼らなら確かにこんなことをやりかねないと判断したのかもしれません。そして何と言っても彼が恐れていたのは、パウロがローマ市民であったことです。万が一にも彼を守り切れないことがあったら、自分の責任問題になります。そこで急いで確実な対策を講じたのです。

それにしても、パウロをカイザリヤまで護送するための部隊は、大げさと言えるほどのものでした。暗殺計画に加わっていた者たちは 40 人以上であったとありますが、23 節の歩兵 200 人、騎兵 70 人、槍兵 200 人を足すと、合計 470 人になります。敵と比べて約 12 倍もの人数です。それほどの人々がパウロ一人を護送するためにパウロを取り囲み、夜の間に出発したのです。思い出すのは、アラムの王がエリシャを捕まえようとして町を包囲した時のことです。エリシャとともにいた若者は朝起きて、アラムの馬と戦車と軍隊が町を包囲しているのを見て、「ああ、ご主人さま。どうしたら良いのでしょうか。」と叫びます。それに対してエリシャは「恐れるな、私たちとともにいる者たちは、彼らとともにいる者よりも多いのだから」と言い、主に「どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください」と祈ります。するとどうだったでしょう。若者の目は開かれ、何と火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちているのを見たのでした。詩篇 34 篇 7 節：「主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。」神はそうにご自身のしもべを守ってくださいますが、この時のパウロを取り巻く 470 人の部隊は、それを目に見える仕方でも現わすものだったでしょう。

さてこの際、千人隊長はペリクス宛てに次のような文面の手紙を書いた、と 25 節に記されています。ここに千人隊長の名前はクラウデオ・ルシヤというものであったことが初めて記さ

れます。そして手紙を見ると、ルシヤは自分の評価・自分の業績に一番関心のあったことが分かります。27 節で彼は、パウロがローマ市民であることを知って助け出したと述べていますが、実際はそうでないことを私たちは見て来ました。彼は自分がしっかりローマ市民を守っているとアピールしようとして自分に都合良く書いています。そして彼の手紙でもう一つ注目値することは、彼がパウロについて死刑や投獄にあたる罪はないと言っていることです。この手紙を持ってパウロたちを送り出します。

エルサレムからカイザリヤまでは約 100 km で、アンテパトリスまでは約 60 km でした。そこまで連れて行けば、もう大丈夫と判断されたのでしょうか。アンテパトリスから先は 70 人の騎兵たちに任せ、400 人の兵士たちは兵営に帰ります。そして翌日、パウロは無事カイザリヤに着きます。ユダヤ人の陰謀が実行される前に、こうしてパウロは彼らの手の届かないところへ運ばれたのです。総督ペリクスはパウロに一旦会った後、「あなたを訴える者が来てから、良く聞くことにしよう」と言って、パウロをヘロデの官邸に守っておくようにと命じます。

以上の使徒の働き 23 章後半。ここには神がこうしたとか、キリストがこうしたとか、聖霊がこうしたといった記述は一つもありません。あるのはユダヤ人が陰謀を企んだとか、パウロの姉妹の子が待ち伏せ計画を耳にしたとか、千人隊長ルシヤが暗殺を避けるために迅速かつ慎重な対応を取ったということなどです。すべて人間の行動です。しかしルカがこうした記録を通して言いたいこと、それは神がそこにおられないように思え、人間だけが動いているような出来事にも神の摂理はあるということでしょう。神は一見それとは分からないような隠れた形で働いている。だから私たちも神の御手がはっきり見えない状況でも神の摂理を信じ、その信仰に立つ歩みをするように！ということでしょう。

神の摂理とは何か良いことが起こった時だけでなく、自分にとって思わしくない状況、苦しく感じる状況でも告白されるべきものです。このことで思い起こされるのは創世記のヨセフ物語でしょう。彼は兄弟たちから憎まれ、売り飛ばされて、エジプトで奴隷の生活を送ります。またエジプトの地で散々な目に会います。人の目には最悪の状況で彼は生活します。しかし私たちが見るのは、それらすべてのことが用いられる形で、彼はやがてエジプトの王パロに次ぐ大臣へ引き上げられるということです。それは決してたまたまそうなったという話ではなく、神の奇しい摂理によって、そう導かれたということを創世記は語っています。ヨセフ自身、そのことを創世記 50 章 20 節で兄弟たちに対し、こう言っています。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」これはヨセフの兄弟たちの責任を軽くするものではありませんが、大事なことは、ヨセフが経験した暗黒の日々も、神の最も賢くきよい摂理の下にあったということです。ローマ書 8 章 28 節：「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

パウロも今日の箇所では最初は恐ろしい状況にありました。今度こそ命が危ないと思われる状況でした。しかし主はその危険から不思議な形で救い出してくださいました。そればかりか、ユダヤ人たちの行動を用いてパウロをカイザリヤへと進ませ、ローマでもあかしを！という約束を前進させておられます。この苦難さえ、さらに良い御心実現のために効果的に用いられています。

これは私たち一人一人にも当てはめて考えられるべき真理です。私たちは自分の思う通りでない状況に今、自分があるかもしれません。そして他の色々な人と自分を比べて、自分ももっと違う環境にあったら、あの人のような状況にあったら、もっと違う人になっていただろうにと思うことがあるかもしれません。もっと別の教育を受けていたなら、もっと別の性格を持っていたなら、もっと別の環境にあったら、もっとより良く神のために働く人となることができたら、と思うかもしれません。しかし神の摂理を信じる者は、そうは言ってはならない。神は環境に制限されるお方ではありません。むしろ私たちは神のご計画に基づく神の賢い摂理のもとで、今の環境、今の状況に置かれている。神が今の状況から何を導いてくださるか、私たちに言い当てることはできません。神はご自身の内に明確なご計画を持っておられます。それに基づいて今の状況に私たちを置いておられ、必ずご自身の最善の御心を成し遂げられる。

ですから、今日の箇所が語っているメッセージは、私たちはどんな中でも、たとえ今日の箇所最初のパウロのような危機的な状況にあっても、なお神の賢い摂理の御手を信頼し続け、神に仕え続けよ！ということでしょう。神はご自身がしようとしていることをすべて知っておられます。そしてあらゆることを用いて、そのご自身の御心を実現されます。無駄なことは一つもありません。そうして私たちにとって益となる計画を実現し、またご自身の最も良い御心を実現されます。その神の御手の中に私の生活すべてが包まれていることを感謝し、慰めと力を頂きながら、どんな状況でもなお神を信頼し続け、最善の御心が現れることに向かって導いていただく幸いに歩みたいと思います。